

『隋唐演義』の烈婦朱貴児考

巨部, 啓子
九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/19666>

出版情報：中国文学論集. 39, pp.73-87, 2010-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

『隋唐演義』の烈婦朱貴児考

且 部 啓 子

一 隋煬帝に仕えた烈婦朱貴児

隋煬帝の一宮女である朱貴児を詠んだ清・陳文述の「朱貴児歌」〔頤道堂詩選〕卷十八に、次の一節がある^①。

獨將一死殉君王 獨り一死を將つて君王に殉じ、

留取芳名重千載 芳名を留取めて千載に重んぜらる。

右では、美貌ではなく、君王に対する殉死によつて名声を後世まで留めた、と朱貴児のことを評価する。ところが、史書を確認すると、煬帝の死は、『隋書』卷四、煬帝紀下に次のように記載される。

（義寧）二年（六一八）三月、右屯衛將軍宇文文化及、武貴郎將司馬德載、元禮、監門直閣裴虔通、將作少監宇文智及、武勇郎將趙行樞、鷹揚郎將孟景、內史舍人元敏、符璽郎李覆、牛方裕、千牛左右李孝本、弟孝質、直長許弘仁、薛世良、城門郎唐奉義、醫正張愷等、以驍果作亂、入犯宮闈。上崩于溫室、時年五十。二年三月、右屯衛將軍宇文文化及、武貴郎將司馬德載、元禮、監門直閣裴虔通、將作少監宇文智及、武勇郎將趙行樞、鷹揚郎將孟景、內史舍人元敏、符璽郎李覆、牛方裕、千牛左右李孝本、弟孝質、直長許弘仁、薛世良、城門郎唐奉義、醫正張愷等、驍果を以て乱を作し、宮闈に入犯す。上溫室に于いて崩す、時に年五十。

また、後世の『資治通鑑』卷一百八十五、唐紀、高祖武德元年（六一八）では、やや具体的な状況を説明し、化及又使封德彝數帝罪。帝曰「卿乃士人、何爲亦爾。」德彝赧然而退。帝愛子趙王杲、年十二、在帝側、號慟不

『隋唐演義』の烈婦朱貴児考

已、虔通斬之、血濺御服。賊欲弑帝、帝曰「天子死自有法、何得加以鋒刃。取鳩酒來。」文學等不許、使令狐行達頓帝令坐。帝自解練巾授行達、縊殺之。(化及又封德彝をして帝の罪を数めしむ。帝曰く「卿は乃ち士人なり、何為れぞ亦爾るや。」と。德彝赧然として退く。帝の愛子趙王杲、年十二、帝の側に在りて、号慟して已まず、虔通之を斬れば、血御服に濺ぐ。賊帝を弑さんと欲すれば、帝曰く「天子の死には自ら法有り、何ぞ加ふるに鋒刃を以てするを得ん。鳩酒を取りて来れ」と。文學等許さず、令狐行達をして帝を頓して坐せしむ。帝自ら練巾を解きて行達に授くれば、縊りて之を殺す。)

と記す。このように、『隋書』『資治通鑑』では、煬帝の死に言及する全箇所、殉死した宮女の記述は見えない。歴史書には、隋の煬帝が数多の宮女たちに困まれて過ごしたことを記録するが、宮女の名を留めない。朱貴児は後世の物語のみがその名を伝える架空の宮女であり、隋末の反乱の際に賊臣の前に勇ましく立ちはだかり、煬帝と死を共にした殉難の宮女として知られる。清初の講史小説『隋唐演義』では、朱貴児を「烈婦」、すなわち「生命を犠牲にして節操を守った女性」として称揚し、皇后蕭氏を「失節」の皇后として対比的に描くことで、その評価をより高めている。冒頭の陳文述の詞のように、清代は烈死によって芳名を留める女性が少なくなかった時代であった。

『隋煬帝艷史』や『隋唐演義』等の明清小説に描かれる、姓名と個性を持った宮女たちの原型は、いくつかの唐宋時代に書かれた小説に存在し、後の煬帝故事を描く作品は主にこれらに取材して構成されたものである。とりわけ、『隋唐演義』では物語の始末を担う重要な役割を果たすにも関わらず、『隋唐演義』に関する先行研究では、朱貴児が実在しないことや、その德行にまつわる逸話の増補と称揚に込められた作者の意図については深く追求されていない。そこで、本論文では『隋唐演義』において種々の德行を付与され、称賛された朱貴児について、小説の襲用関係を調査することで人物形象の変化を明らかにするとともに、小説が創作された時代の歴史的背景を検討することで、明清小説の女性像に反映された模範とすべき婦徳について考察したい。

二 『海山記』から『隋唐演義』に至る朱貴児像

既に確認したように、正史では、煬帝のために殉死した宮女の記述は見られない。ところが、『太平広記』巻三百五十、鬼部、顔濬⁵には、唐の会昌中（八四一～八四六）、顔濬が建業に遊んだ際に出会った、趙幼芳と名乗る二十歳程の隋宮御女の幽霊が、我が身のこととして、

煬帝江都、爲侍湯膳者。及化及亂兵入、某以身蔽帝、遂爲所害。（煬帝の江都にて、侍湯膳爲りし者なり。化及の乱兵の入るに及び、某身を以て帝を蔽ひ、遂に害せらるる所と爲る。）

と死に至った経緯を語り、その後、蕭后により煬帝と共に葬られたと述懐する記事が見える。しかし、趙幼芳は、『隋唐演義』等の明代以降の小説には登場しない。それに代わって煬帝の難に殉じた宮女として名が現れるのが朱貴児である。

朱貴児が煬帝と共に逆賊に殺害された状況を伝える小説作品には次のようなものがある。⁶（以下、各書名直下の〔括弧〕に、本稿において使用する略称を付記し、成立時期に係る序文の年号を示す。）

- ① 作者未詳『煬帝海山記』（海山記）宋・劉斧撰輯『青瑣高議』後集卷五所収
 - ② 明・馮夢龍『醒世恒言』卷二十四「隋煬帝逸遊召譴」天啓七年（一六二七）可一居士序
 - ③ 明・齊東野人『新鵠全像通俗演義隋煬帝艷史』八卷四十回（艷史）崇禎四年（一六三二）野史主人序
 - ④ 明・袁于令『劍嘯閣批評秘本出像隋史遺文』十二卷六十回（隋史遺文）崇禎六年（一六三三）吉衣主人序
 - ⑤ 清・褚人穫『四雪草堂重訂通俗隋唐演義』二十卷一百回（隋唐演義）康熙三十四年（一六九五）褚人穫序
- この中で、①『海山記』②「隋煬帝逸遊召譴」③『艷史』は隋煬帝の一代記であり、「隋煬帝逸遊召譴」と『艷史』は、『海山記』等の唐宋間の小説を下敷きに、煬帝の歡樂とその末路を反面的教訓として描く。一方、④『隋史遺文』⑤『隋唐演義』は共に隋唐の興亡を描いた講史小説であり、煬帝故事は全体の一部に過ぎない。『隋唐演義』は『艷史』や『隋史遺文』等の先行する小説を敷衍して書かれており、内容の重複する箇所もある。⁷

なお、『艷史』『隋唐演義』での朱貴児の身分は「美人」とされる。「美人」とは、『隋書』后妃伝によると、后、

『隋唐演義』の烈婦朱貴児考

三夫人、九嬪、婕妤に次ぐ位で正四品、才人と併せて合計十五人が置かれた、后妃としては中位の身分である。^⑧以下、各作品における朱貴児の死に関わる、夜半、宮中に賊徒が押し入る場面の記述を比較する。

① 『海山記』

帝常所幸朱貴児在帝傍、謂（司馬）戡曰「三日前、帝慮侍衛薄衣小寒、有詔、宮人悉絮袍褲。帝自臨視之、數千袍兩日畢工。前日賜公策、豈不知也、爾等何敢逼脅乘輿。」乃大罵戡。（煬帝の傍らに日頃寵愛している朱貴児がおり、司馬戡に対し、「三日前、陛下は侍衛が薄衣では寒かろうと、宮女に服に綿入れするようにと詔を下されました。陛下は御自ら監督なさり、数千着を二日で仕上げさせました。先日それを官邸で下賜されたことを知らぬはずはないのに、そなたたちは何故陛下を脅かすのですか。」と言ひ、大いに戡を罵つた。）

この後、司馬戡は煬帝の首級を以て天下に謝罪したいと、劍を手に煬帝に迫る。煬帝が人主諸侯の流血は早魁の災害を招くと説いたため、司馬戡は縊死を要求する。

戡進帛、帝入閣自絶。貴児猶大罵不息、爲亂兵所殺。（戡が絹布を差し出すと、帝は内室に入り自殺した。朱貴児はなおも大いに罵つて止まず、乱兵に殺された。）

朱貴児は乱兵に対し、煬帝によるつい三日前の綿入れの恩徳を述べ、謀反を罵るが、煬帝は縊死させられる。朱貴児はその後も逆賊等を罵り続けたために殺された。最期まで宮女と共に過ごした君主への「殉死」を描く。

② 明・馮夢龍『醒世恒言』巻二十四「隋煬帝逸遊召譴」

朱貴児が煬帝の恩を語り罵る部分は『海山記』と同じだが、煬帝と朱貴児の死の順番が入れ替わる。『海山記』では煬帝が縊死させられた後に殺された朱貴児が、『醒世恒言』では徳戡を罵るとすぐに斬殺される。

帝常所幸朱貴児在帝傍、謂徳戡曰「三日前、帝慮侍衛秋寒、詔宮人悉絮袍褲、帝自臨視。造數千領、兩日畢功。前日班賜、爾等豈不知也、何敢迫脅乘輿。」乃大罵徳戡。徳戡斬之、血濺帝衣。……（帝）命索藥酒、不得。左右進練巾、逼帝入閣自經死。

朱貴児は、煬帝の綿入れの恩を語り、徳戡を大いに罵る。すると、徳戡が朱貴児を斬り、その血が煬帝の衣服に飛び散った。煬帝は毒酒を求めさせたが、許されず、左右の者は白布を差し出し、煬帝に迫って内室で自縊させた。

君主を弁護したために殺された形となり、後世の朱貴兒故事には、この作品の死の順序が継承される。

なお、『海山記』に見えない、煬帝が毒死を許されなかったとの記述は、先に引用した『資治通鑑』の記事に基づくものである。歴史書を参照して状況を具述する手法に、明末における講史小説編修の特徴が現れている。

③ 明・齊東野人『艷史』第三十九回「宇文謀君 貴兒罵賊」

煬帝を弁護し、徳戡等を罵る朱貴兒の台詞が前二者に比べ大幅に増えている。綿入れの恩を語った朱貴兒は、徳戡等を「逆賊」と称して大いに罵る。他の作品と異なる点は、罵る言葉が具体的に書かれていることである。

朱貴兒聽了大罵道「逆賊、焉敢口出狂言。萬歲縱然不徳、乃天子至尊、爲一朝君父、冠履之名分凜凜。汝等不過侍衛小臣、何敢逼脅乘輿、妄圖富貴、以受萬世亂臣賊子之罵名。趁早改心滌慮、萬歲降旨赦汝等無罪。」……

「背君逆賊、汝倚兵權在手、輒敢弄兵禁庭。今日縱然不敵、然隋家恩澤在天下、天下豈無一二忠臣義士、爲君父報讎、勤王之師一集、那時將汝等碎屍萬段、悔之晚矣。」……「人誰無死、我今日死萬歲之難、香名萬世。不似汝等逆賊、明日碎屍萬段、也不免臭名千載。」罵不完、亂兵刀劍早已齊上、可憐朱貴兒玉骨香魂、都化做一腔熱血。（煬帝を殺さんとする司馬徳戡の言葉を）聞くや朱貴兒は大いに罵つて言う、「逆賊め、よくもそのような世迷言を。たとえ陛下が

不徳を為そうとも、天子は至尊にして、一朝の君父であり、自分の綱紀は厳然としている。お前たちは侍衛の小臣に過ぎぬというのに、何故陛下を脅かし、富貴を得んとして万世に乱臣賊子の汚名を受けようとするのですか。すぐに悔い改めるならば、陛下はお前たちをお許しになり無罪となさるでしょう。」……「主君に背く逆賊め、兵権が手中にあるのをいことに、畏れ多くも兵を禁中に乗り込ませるとは。今はたとえ敵わずとも、隋朝の恩沢は天下に行き亘つており、必ずや天下の忠臣義士が、君父のために仇を討つでしょう。勤王の軍が一同に集つた、その時こそお前たちがばらばらの屍となる時、悔やんでも遅いのです。」……「人は誰しも死ぬもの、私は今日陛下の御災難のために死のうとも、美名を万世に留めましよう。しかしお前たち逆賊は明日にも無残な屍となり、醜名を千載に残すほかないのです。」罵り終わらぬうちに、乱兵の刀剣が一斉に振り下ろされ、憐れ朱貴兒の身魂は、溢れる鮮血と化してしまった。）

なお、朱貴兒は『艷史』全四十回中の計十八回に登場するが、煬帝が「最も寵愛する宮女の一人」として他の宮女と共に詞を歌い、宴席を共にするだけで、第三十九回以外では特別に目を引く行動はない。

④ 明・袁于令『隋史遺文』第五十回「化及江都弑主 魏公永濟鏖兵」

『隋唐演義』の烈婦朱貴兒考

朱貴児が煬帝の恩を語り、煬帝が自ら無罪を主張すると、賊臣等は煬帝の罪を挙げて責め、大勢の兵を以て迫る。朱貴児は見るに耐えず、大声で賊を罵り、殺される。その台詞は『海山記』以上に短く簡潔である。

宮嬪朱貴児道「前日、帝還憐你等寒、命我等裝綺衣賜爾、何負而反。」隋主自道無罪。……只見一官洋洋而來、是封德彝、正奉宇文化及命來數帝罪。隋主道「卿士人、何爲亦爾。」羞得德彝慚惶滿面、忙忙退去。但是衆賊百般凌逼。朱貴児看得不堪、放聲大罵、被賊人砍了。(宮嬪の朱貴児が言う、「先日、陛下はお前たちが寒かろうと憐れみなさり、私たちに官服を用意させてお前に下賜なさったのに、何故謀反を起こすのですか。」煬帝は自ら無罪を主張した。……見れば一人の官人が悠々とやって来る、封德彝が、宇文化及の命令を奉じて煬帝の罪を問いただしに来たのであった。煬帝が、「そなたは士大夫であるのに、どうして擾乱に肩入れするのか。」と言うと、封德彝は恥じ入り、そそくさと立ち去った。しかし逆賊等は様々に侮辱し脅迫した。朱貴児は見るに堪えず、声を振り絞って大いに罵り、逆賊に斬り殺されてしまった。)

特筆すべきは、朱貴児が殺害された直後に置かれる、その行動を評価した詩である。

素有當熊膽 嬌傳罵賊聲
素より有り 当熊の胆、嬌として伝ふ 罵賊の声。
睢陽有遺烈 應得並芳名 睢陽に遺烈有り、応に芳名を並ぶるを得べし。

第一句目の「当熊」とは、勇敢な女性を指す言葉であり、前漢元帝の宮女馮昭儀が僇仔であった頃、鬪獸用の檻から脱走した熊が元帝に向かつて来たため、体を張って熊を止めようとした故事を典故とする(『漢書』卷九十七、外戚伝、孝元馮昭儀伝)。睢陽(今の河南省商丘県の南)は、唐の忠臣張巡が安祿山の乱に抗戦した地である。この詩により、短い記述でありながらも朱貴児の行動が命を投げ出した忠君の行為であることを示す。

なお、第二十六回にも朱貴児は登場するが、煬帝の行楽に侍し、詞を歌うのみである。

⑤ 清・褚人穫『隋唐演義』第四十七回「看瓊花樂尽隋終 殉死節香銷烈見」

この場面は『艷史』第三十九回を襲用しており、『艷史』の項に示した「人誰無死」以下の台詞が削られるが、台詞や状況はほぼ同様で、煬帝の徳載等に対する恩の内容が、『隋書』卷四、煬帝紀下、大業十三年(六一七)の記事「九月己丑、帝括江都人女寡婦、以配從兵(九月己丑、帝江都の人の女寡婦を括めて、以て從兵に配す)」に基づき、媒酌の恩に改変されるのみである。但し『艷史』では殺害される后妃宮女が朱貴児のみであるのに対し、『隋唐演義』では他

の宮女等も難に殉ずるといふ話が増補される。

朱貴児の名は『隋唐演義』全一百回のうち計十六回に見える。⁽¹⁷⁾ 重要な点は、第四十七回以外にも、煬帝と宮女たちとの艶情を中心に描く『艶史』とは異なり、単に寵愛を受けているだけでなく、道徳的に評価される行動をとることである。この点については後で具体的に検証する。

また、この外、『隋唐演義』第六十回以降を簡略化した内容の『混唐後伝』首巻五回、八巻三十二回にも朱貴児について言及される箇所が二回あるが、『隋唐演義』と重複するので贅述しない。⁽¹⁸⁾

さて、朱貴児故事に関して注目すべき増補がなされた『隋唐演義』は、隋文帝の即位から唐玄宗の崩御までの歴史故事を、歴史書や先行する小説を基に編修し、創作を加えた講史小説で、清代初期の江南の文人、褚人穫（字稼軒、号石農、草堂名四雪草堂）の作である。褚人穫は蘇州長洲の文人一家に生まれたが、科挙による仕官の道を選ばず、袁于令等の江南の文人と交遊した。著作は、他に『堅瓠集』『読史隨筆』『退佳瑣錄』『統蟹譜』等がある。叔父の褚篆が記した『堅瓠九集』序（康熙壬申（三十一）年（一六九二）の識語を有する）によると、「姪稼軒、……尤好搜揚軼事、於群書中鈔撮靡遺（姪の稼軒（人穫）は、……尤も軼事を搜揚するを好み、群書中に於いて鈔撮して遺すところ靡し）」とあり、褚人穫が様々な書籍から逸話を拾集することを好んだことがわかる。⁽²⁰⁾

『隋唐演義』の編修態度については、褚人穫の自序に次のように述べる。

昔籀菴袁（于令）先生、曾て予に所蔵の『逸史』を示さるるに、隋煬帝・朱貴児、唐明皇・楊玉環の再世因縁を載するは、事殊に新異にして喜ぶべし。因りて与に商酌して本伝に編入し、以て一部の始終関目と為す。之を『遺文』『艶史』に合し、而して始めて其の事を広む。之を窮幽僊証に極め、而して已に其の局を竟ふ。其の間の闕略する者は之を補ひ、零星なる者は之を刪る。更に当時の奇趣雅韻の事を採りて之に点染し、彙めて一集を成すに、頗る旧観を改む。⁽²¹⁾

つまり、褚人穫は袁于令所蔵の『逸史』に見える、隋煬帝から楊貴妃へ、朱貴児から唐玄宗への転生譚を物語の筋とし、『隋史遺文』『艶史』と合成して増補刪削を行い、一つの作品とした。その上で、更に関連する様々な故事を採り、文飾を加え、『隋唐演義』を通じて歴史故事への新たな見解を示そうとしたのである。

三 朱貴児の忠君愛主と蕭后

それでは、褚人穫が『隋唐演義』の中で朱貴児にどのような人物像を付与し、唐の皇帝へと転生するに相応しい女性として描いたのか、その増補箇所の中で特に道德觀念に関わる部分を検討する。

まず、朱貴児が煬帝からとりわけ目を掛けられるきつかけとなった一段である。

第三十四回、西苑での酒宴で酔い潰れた煬帝が、突然激しい頭痛を訴えて人事不省となる。蕭后が太医（医薬を司る役人）の処方した止痛薬を飲ませるが煬帝は目を覚まさない。悲しむ朱貴児が報恩の大義を述べると、宮女袁宝児の提案で、宮女たちは香を焚き、各々の寿命を十年ずつ減らす代わりに煬帝の病が治るよう天に祈ることになる。しかし、靈験が現れるとは限らないと考えた朱貴児は、自らの腕の肉を切り取り、薬に混ぜて煬帝に飲ませる。すると、煬帝は意識を取り戻す。この時、朱貴児は次のように考え、天に祈りを捧げた後、「割臂」を実行した。

我思爲子女者、往往有割股救親。反享年有永。我今此身已屬朝廷、即殺身亦所不惜。何況體上一塊肉。（思うに子女たる者は、往々にして股の肉を割いて親を救い、その享年を退けて長寿となすもの。私は今、朝廷に属する身なのだから、この身を殺すことも惜しくはない。況して体の一部ならば尚のこと。）

台詞の冒頭に、「爲子女者、往往有割股救親」とあるが、「割股」は、子が病気の親に自分の肉を食べさせる治療法で、孝行の一種である。唐代には行われていたが、特に明清時代に高く評価され、流行した孝の精神の表出形態であった。『明史』卷三百二、列女伝には、揚州興化の陸鰲の妻倪氏が、姑が鼻に悪性の腫れ物を患った際、香を焚き天に祈り、左肩の肉を割いて姑に食べさせたところ、その病は癒え、孝婦と称されたという記事がある。父母のもとを離れて宮中に入った朱貴児は、君父たる煬帝のために「割股」ならぬ「割臂」を実践した。

褚人穫は直後の詩で、朱貴児が身命共に惜しまなかったことを、

鬚眉男子無爲 柔脆佳人偏異
鬚眉の男子は無為にして、柔脆の佳人は偏へに異たり。

今朝割股酬恩 他年殉身香史
今朝、股を割きて恩に酬い、他年、身を殉じて史に香し。

と賛美する。「他年殉身香史」は明らかに第四十七回の朱貴児の死を指す。第三十四回でその死に言及していること

から、實在しないはずの朱貴児の最期は、隋の歴史的一幕として読者に知られていたことが窺われる。

第三十四回の「割臂」を受けた第三十五回。頭痛から回復した煬帝は、後日再び西苑で宴を開き、朱貴児が痛々しく腕の傷痕を縛っているのを見つける。「割臂」の一件は、蕭后や夫人たちの嫉妬を避けるため、一部の宮女以外には内密にされていたが、他の宮女から事情を聞いた煬帝は、朱貴児の真心に感動し、朱貴児と二人きりで会話を。「天子の恩に報いるためには身命も惜しくない」と奏上した朱貴児を、煬帝は次のように評価する。

宮中婦女、准千准百、朕看起來、止不過一時助興。怎能個有似你這樣真心愛主。(宮中の婦女は、百人千人といふが、朕が見たところ、一時の興を助けるに過ぎぬようだ。そなたのように衷心から主君を愛する者はいまい。)

続いて、朱貴児の位階を上げたいが、后妃たちの嫉妬を受けてはいけなからと、煬帝は、自分の死後、朱貴児が宮中を出て良夫と結婚し、天寿を全うするよう遺言しようと言う。しかし、この言葉に朱貴児は納得せず、

妾聞臣忠不二君、女烈不二夫、妾雖卑賤、頗明大義。不要說陛下春秋正富、假使百年後、設逢大故、妾若再欲偷生於世、苟延朝夕者、永墮輪迴、再不得人身。(私は「忠臣は二君に仕えず、烈女は二夫に仕えない」と聞いており、卑しい身分ではありませんが、大義はわきまえております。陛下がご健在であられることは言うまでもないものの、もしも百年の後に、陛下がお隠れになった時、私がまだこの世に生を貪り、寸刻でも生き長らえたならば、永遠の輪迴に墮ち、二度と人の身に生まれることはないでしょう。)

と述べる。この言葉に感動した煬帝は、星月を証人として、来世では夫婦になろうと誓いを立てる。

朱貴児の台詞にある「臣忠不二君、女烈不二夫」と同様の表現は、古くは『史記』巻八十二、田単列伝の王蠋の言葉に見え、君主への忠義と夫への貞節が同等に評価されてきたことがわかる。

第三十七回では、流産した沙夫人が、母妃を亡くした趙王杲を養育することになった際、煬帝は、沙夫人と共に愛息趙王の養育に当たるよう、朱貴児に命じる。第四十七回、反乱が頻発し、事態が切迫すると、朱貴児は趙王を脱出させる手筈を整え、沙夫人のもとに宮女薛冶児を遣わし、生きて趙王をお守りするようにと伝え、自らは宮中に残る。沙夫人はこれに涙を流し、「(朱)貴姐可謂忠貞兩盡矣(貴児は忠貞いづれも尽くしているわ)」と言う。「忠」は趙王を守ること、すなわち隋王家の存続、「貞」は隋朝と命運を共にしようとする態度を評価したものであろう。

第四十七回では、隋王家の血筋を絶やさないための尽力、そして、煬帝のために賊を罵り、命をも擲った朱貴児の忠君の態度を描く。これこそが、褚人穫が考える、気高い女性に相応しい最期だったと考えられる。

朱貴児の徳行は、専らその烈死について、その死後の場面でも評価されている。

○第四十八回冒頭で、朱貴児を含む宮嬪たちの殉難を評価した言葉。

突出感恩知己報國亡身的幾個婦人來、殉難捐軀、毀容守節、以報鍾情、香名留史。(特に知己の恩に感じ国のために身を擲った婦人たちは、難に殉じ命を捨て、花貌を毀ち節を守り、寵愛に報い、美名を歴史に留めた。)

○第六十七回、蕭后たちが煬帝の墓所を訪れた場面。煬帝の墓周辺にある、殉死した宮女たちの墓について、地の文での説明に、「左首一石碑、是烈婦朱貴兒美人靈位(左の石碑は、烈婦朱貴兒美人の靈牌)」とある。

○第六十八回。危篤に陥った唐の太宗は、夢の中で冥府へ行き、冥府の役人の案内で、煬帝のために死んだ宮女たちに会う。役人は朱貴児について、「他生前忠烈、罵賊而死(彼女は生前忠烈で、賊を罵って死んだ)」と説明し、朱貴児は皇帝に、他の宮女たちはその臣下に生まれ変わるのだと言う。太宗も朱貴児等の殉難を賛美する。

○第一百回。安史の乱の後、長安に戻った唐玄宗は、道士に命じて亡き楊貴妃の魂を求めさせる。仙界へ行った道士は、仙人張果から、玄宗と楊貴妃の前世が、朱貴児と煬帝であることを聞かされる。張果は、朱貴児が玄宗に生まれ変わった理由をこう述べる。

貴兒忠於其主、罵賊殉節而死。天庭最重忠義、應得福報。(朱貴児は主君に忠実で、賊を罵り節に殉じて死んだのだ。天は最も忠義を重んじるので、当然果報を受けるべきだ。)

以上のごとく、宮女朱貴児は、褚人穫により高い評価を与えられた。

一方で、皇后蕭氏に対する評価は辛辣である。蕭后は、反乱が起きた際、煬帝と共にいたが、乱兵が押し入ると煬帝を置いて逃げ出す。その後、蕭后に懸想した宇文化及に命乞いをし、行動を共にする。⁽²⁸⁾隋朝遺臣の家人、楊芳の台詞では、「蕭后已經失節」(第四十八回)と、明確に批判する。

更に、第五十回、蕭后等は、宇文化及を倒した夏主竇建徳のもとに身を寄せるが、竇建徳の妻曹后により冷たくあしらわれ、煬帝のために殉死しなかったことを、面と向かって詰られる。

錦繡江山爲這幾個妮子弄壞、幸喜死節的、殉難的、各各捐生、以報知己、稍可慰先靈於泉壤。(錦繡の中国はこの女どもによつてめぢやくちやにされたのです、運良く節に死に、難に殉じ、命を擲つて知己に報いれば、黄泉で少しは先帝の御霊をお慰めできたでしょうに。)

同じ女性によるこの痛烈な批判に続き、第五十一回では、突厥の地で再会を果たした異腹の子、趙王からも蔑まれる。養母沙夫人と共に、義成公主の降嫁先である突厥に逃れた趙王は、蕭后が同様に突厥の公主を頼つて来た際に、蕭后への挨拶を拒否した。趙王は、保母の薛冶兒に、蕭后を避けた理由について、

他是我的嫡母、自然該行大禮。今聞他又歸許氏、母出與廟絕、母子的恩情已斷。況他又是失節之婦。(あの人は我が父の正妻で、当然大礼を行うべきだろう。しかし、今聞けば彼女は許氏(許公字文化及)に嫁したとか、母は出て行き楊家の祖廟との関係が絶え、母子の恩情はすでに断られた。況して彼女は節を失つた婦人だ。)

と話す。褚人穫は、この言葉に悲しむ蕭后について、地の文に、「子不認母、節不成節、樂不成樂、自貽伊戚如此(子は母を認めず、節は成らず、樂しみは成らず、このように、自ら憂患を残した)」と記す。

以上のように、殉節の宮女への称賛に対して、失節の皇后への批判はあからさまである。³⁰⁾
合山究氏の論文に次のような指摘がある。

当時の既婚の女性は、もし夫が死んで寡婦となった場合には、人々の蔑みのまなざしを受けて再婚するか、節婦としての苦難の道を歩むか、惨烈な殉死によつて烈婦となるかの三通りの生き方しかできなかったのである。

明清時代は、夫への殉死や、寡婦を貫くことが盛んに称賛される一方、改嫁は道德上の非難の対象となつた。³¹⁾蕭后に関しては、夫であり主君でもある煬帝を見捨て、賊臣宇文化及と行動を共にしたことが「改嫁」に相当すると見做され、「失節」と厳しく非難されたのである。

四 教化の書物としての講史小説

煬帝と死を共にした朱貴児が、『隋唐演義』において、明確に「烈婦」という言葉で称賛された理由は、現実起きた明の滅亡と、小説作品における隋の滅亡とを、作者が重ねて見たことが一因として考えられる。褚人穫が伝へ聞いたであろう、明末の動乱期における宮人や民間の人々の身の処し方は、次のようなものであった。

崇禎十七年（一六四四）、李自成によつて京師北京に攻め込まれた崇禎帝（莊烈愍皇帝）が、万歳山において自縊し、事实上、明は滅亡する。この戦いで、兵士以外にも多くの人々が落命したことを『明史』は記載する。卷三百五、王承恩伝に見える、皇帝の側で自ら首を吊つて殉死し、忠愍と諡され、祠の建立を以て、清朝から忠節を称賛された、宦官の王承恩。同書卷一百十四、莊烈帝愍皇后周氏伝に見える、京城が陥落すると、崇禎帝の命令で、皇帝に先んじて自決した周皇后。同伝に記載される、賊が宮中に押し入つた際に、「我輩必遭賊汚、有志者早爲計（我輩は必ず賊の汚すに遭はん、志有る者は早く計を為せ）」と叫び、宮中の川に身を投げて死んだ宮女、それに続いた二百人も宮女。枯れ井戸に身を投じたが死に切れず、賊に捕まり婚姻を迫られたため、相手を殺し、自殺した宮女。国難に殉じた宮人は数知れない。

また、『明史』忠義伝は、崇禎年間（一六二八―一六四四）、賊兵が各地を襲撃する毎に、多くの明朝の武人たちが賊を罵つて死に、敗北を悟ると自決したことを伝える。更に、同書卷二百九十四、王家録伝によると、民間人の住む城市では、「婦女死義者數千人、井中屍滿（婦女の義に死す者は數千人、井中に屍滿つ）」という惨状であった。忠義伝は、義士が賊に屈さなかつたことを評価し、百世の後にも名を留めると賛美する。更に、同書列女伝は、崇禎年間に賊軍の襲撃に遭い、家族や自らの節操を守るため、賊を罵り、壮絶な死を遂げた女性の記事を多数記載している。我が身を顧みずに最後まで煬帝を擁護し、賊臣を罵り続けた朱貴児を高く評価したのは、褚人穫の生きた時代に現実に起きた、明人の最期に対する敬意があつたからではないだろうか。『隋唐演義』に見える、忠臣、烈婦への熱烈な称賛は、国家滅亡の時、王朝に従ひ殉じた人々への鎮魂の意味もあつたと考えられる。

以上のように、『隋唐演義』の朱貴児像は、称賛すべき女性と臣下の行いを集大成したものである。その形象から

は、楮人穫が理想とした、主君に仕える者の態度が窺える。そして、徳行の動機ともなり得る「留名」を鍵句とし、小説に登場する隋朝の後妃宮嬪の姿を通じて、清代における、歴史の分岐点で女性が取るべき行動を示した。

『隋唐演義』は、朱貴児の外にも多くの隋唐の烈婦を描き、女性の節操について言及しているが、本稿では特に朱貴児の形象に焦点を絞り、作者楮人穫の一女性観を示した。その忠烈たる形象を描くことで、正史に立てられた「列女伝」のごとく、講史小説における「列女伝」として、女性が規範とすべき生き方を示し、徳行の見本を示す意図があったのではないだろうか。

注

- (1) 『続修四庫全書』集部所収、嘉慶二十二年(二八一七)刻道光増修本影印本を参照。
- (2) 煬帝が毒酒による死を許されず縊死させられたという記述は『隋書』には見えない。『隋書』巻五十九、越王侗伝には、煬帝の死後、恭皇帝侗が王世充に殺害される際の描写に「(侗)於是仰藥、不能時絶、更以帛縊之」とあり、この記事と混同されたものと思われる。
- (3) 合山究「節婦烈女——明清時代の女性の生き方」(原題「節婦烈女論——明清時代の女性の生き方」『中国——社会と文化』第十三号、一九九八年)。後に同氏「明清時代の女性と文学」(汲古書院、二〇〇六年)所収。
- (4) 『隋唐演義』の襲用作品については、魯迅「中国小説史略」、同氏「小説旧聞鈔」、『隋煬帝艶史』については、河野真人「『隋煬帝艶史』に於ける『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷楼記』の襲用について」(九州大学中国文学会『中国文学論集』第二十八号、一九九九年)等に詳しい。
- (5) テキストは中華書局、一九六一年刊を参照。唐・常沂「靈鬼志」にも趙幼芳に関する同様の記事がある。
- (6) 煬帝故事を記す講史小説については河野真人「明清の歴史小説と『艶』の概念について——『隋煬帝艶史』と『隋唐演義』を中心に——」(九州大学中国文学会『中国文学論集』第三十号、二〇〇一年)を参照した。
- (7) 朱易安等主編『全宋筆記』第二編(大象出版社、二〇〇六年)所収『青瑣高議』。明・陶宗儀『說郛』一百卷等にも収

『隋唐演義』の烈婦朱貴児考

録される。撰者については、唐人撰とするが名を欠く、または、唐・韓偓撰とするテキストもあるが、『四庫全書総目』巻一百四十三、子部、小説家類存目は宋人の作であろうと指摘する。

(8) 魏同賢編『馮夢龍全集』（上海古籍出版社、一九九三年）所収、内閣文庫所藏明葉敬池刻本影印本を参照。

(9) 『古本小説集成』（上海古籍出版社）所収、内閣文庫所藏人瑞堂刊本影印本を参照。

(10) 『古本小説集成』（上海古籍出版社）所収、旧帝国図書館所藏名山聚藏板影印本を参照。

(11) 『古本小説集成』（上海古籍出版社）所収、山東大学図書館所藏四雪草堂初印本影印本を参照。

(12) 欧陽健『隋唐演義』綴集成帙考（『文獻』一九八八年第二期。後に同氏『明清小説新考』、中国文联出版公司、一九九二年所収）に、『隋唐演義』における『艷史』『隋史遺文』等の襲用と、褚人穫による増補に関する研究がある。

(13) 『隋書』巻三十六、后妃列伝によると、煬帝の時、后妃嬪御は宴遊に従うために選ばれた。身分は、三夫人、品正第一。九嬪、品正第二。世婦（婕妤十二員、品正第三、美人・才人十五員、品正第四）。女御（宝林二十四員、品正第五、御女二十四員、品正第六、采女三十七員、品正第七）。

(14) 『隋書』や『資治通鑑』では逆臣として「司馬德戡」の名が見えるが、『海山記』は「司馬戡」に作る。

(15) 第十一回〜第十三回、第十五回、第十七回、第十八回、第二十二回、第二十六回、第二十七回、第二十九回、第三十一回〜第三十六回、第三十八回、第三十九回。

(16) 孝元馮昭儀、平帝祖母也。……建昭中、上幸虎園鬪獸、後宮皆坐。熊佚出園、攀檻欲上殿。左右貴人傅昭儀等皆驚走、馮婕妤直前當熊而立、左右格殺熊。上問「人情驚懼、何故前當熊。」婕妤對曰「猛獸得人而止、妾恐熊至御坐、故以身當之。」元帝嗟嘆、以此倍敬重焉。

(17) 第二十八回〜第三十回、第三十四回〜第三十七回、第三十九回、第四十回、第四十七回、第四十八回、第五十回、第六十七回、第六十八回、第八十九回、第一百回。

(18) 竹村則行『鷲鴻記』を襲用した『隋唐演義』の梅妃故事について（『東方学』九十六、一九九八年。後に同氏『楊貴妃文学史研究』、研文出版、二〇〇三年所収）に詳しい検討があり、通行の『混唐後伝』は作者、成立年代共に不確定だが、『隋唐演義』成立以降の清朝中後期に成立した作品であると推測する。

- (19) 卷首第一回、卷八第三十二回がそれぞれ『隋唐演義』の第六十八回、第一百回に対応。
- (20) 褚人穫の伝記については、周鈞韜主編『中国通俗小説家評伝』（中州古籍出版社、一九九三年）に詳しい。
- (21) 昔籀菴袁先生曾示予所藏『逸史』、載隋煬帝・朱貴兒、唐明皇・楊玉環再世因縁、事殊新異可喜。因與商酌、編入本傳、以爲一部之始終關目。合之『遺文』『艷史』、而始廣其事。極之窮幽隱證、而已竟其局。其間闕略者補之、零星者刪之。更採當時奇趣雅韻之事點染之、彙成一集、頗改舊觀。
- (22) 軫生譚が創作された背景には、隋煬帝・楊貴妃は煬と楊の音通、亡国の暗君と傾国の美女という共通点を、朱貴兒・唐玄宗は最後まで愛する人を弁護した顕徳の烈女と明君という共通点を有することが考えられる。
- (23) 『艷史』第二十二回に同じ場面があるが、煬帝の頭痛は太医の処方した薬で収まり、宮女は何もしない。
- (24) 『新唐書』卷一百九十五、孝友列伝序に、「唐時陳藏器著『本草拾遺』、謂人肉治羸疾、自是民間以父母疾、多刲股肉而進」とある。
- (25) 姑鼻患疽垂斃、(倪氏) 躬爲吮治、不愈、乃夜焚香告天、割左臂肉以進、姑啖之愈。遠近稱孝婦。
- (26) 唐・白居易「長恨歌」等の作品に見える、玄宗と楊貴妃が七夕の夜に夫婦の誓いを立てる故事の襲用。
- (27) 「忠臣不事二君、貞女不更二夫」。戦国時代、燕が斉を破った際、斉の王蠋が燕の招請を断った言葉。
- (28) この内容は『艷史』第四十回を襲用したもので、宇文化及は蕭后と煬帝の後宮の宮女たちを我が物にして淫乱に耽るが、『艷史』には、このことに対する節操の観念からの蕭后等への批判は見えない。
- (29) 『隋書』卷五十九、齊王暕伝によると、蕭后と共に突厥に逃れたのは齊王暕の子政道。
- (30) 前掲注(3)の「節婦烈女——明清時代の女性の生き方」。
- (31) 明清時代における女性の烈死、守節の称揚、旌表については、山崎純一「清朝における節烈旌表について——同期列女伝刊行の背景——」（『中国古典研究』第十五号、一九六七年）、陳青鳳「清朝の婦女旌表制度について——節婦・烈女を中心に——」（九州大学東洋史論集）第十六号、一九八八年）を参照。
- (32) 『明史』卷二百八十九、忠義列伝序に、「從古忠臣義士、爲國捐生、節炳一時、名垂百世」、同書卷二百九十四、王家録伝に、「慕義殉忠、志不少挫、無一屈身賊庭、其忠烈又爲天下最」とある。

『隋唐演義』の烈婦朱貴兒考